

子どもと家族にとって 安全で安心な レスパイトの活用と支援

特集にあたって

レスパイトケアの必要性や取り組みの 実際を知り、ケア提供につなげよう

レスパイトケアという言葉に、皆さんはどのようなイメージをおもちでしょうか。「施設に短期間子どもを預け、家族が休養をとること」を思い浮かべる読者が多いかと思います。「入院しなければ受けられないサービス」のようなイメージがあるのではないのでしょうか？

もともとレスパイトケアとは、「一時的中断」「休息」「息抜き」を意味する英語の respite から派生しています。家族が、世話をしているあるいは介護している対象者と離れ、一時的に休息をとることを意味します。場所や時間などは、それぞれの対象者と家族が選択できるものなのです。そのためには、対象者と家族のニーズに合うサービスが提供されなければなりません。そのサービスには、看護も当然含まれてくることでしょう。なぜなら、医療処置を必要としながら地域で生活する子どもたちが増加しているからです。

家族は、常に子どもの様子を観察し、処置をし、世話をしています。就寝時刻が夜中に及ぶこともしばしばあります。就寝時刻が遅くなるだけでなく、就寝途中で目を覚まし、子どもに必要な対応をすることもあります。「万年寝不足状態」であるのは、想像に難くないことでしょう。そのような状況にある家族にとって、「一時的に休息をとることができるサービス」は、必要不可欠なのです。「万年寝不足」になってしまう前にサービスを受けることができれば、何よりです。

しかし、子どもの場合は、そうしたサービスを提供できる機関は、多くは存在しません。特に、医療ケアを必要とする子どもの場合は、看護師の配置が必要であり、その「看護師」の確保が十分にできないことが、レスパイトケアの提供を難しくしている理由としてあります。数時間の短い時間であっ

ても、同様です。施設であっても、自宅であっても、「予定」を立て、「予約」をしないとレスパイトケアは利用できません。「予約できる場所」や「ケアしてくれる人」が少ない状況のなかでは、予約は取りにくく、子どもと家族が満足できる状況がないのが現実です。

家族が子どもとマンツーマンでケアしている状況と施設や病院では、ケア状況が全く異なります。そこでは、子どもも家族も十分な満足を得られないこともあります。こうした課題をかかえているのが、レスパイトケアの状況でもあります。筆者は、こうした状況を少しでも打開できる糸口を見つけ出すことができるヒントが、本特集には含まれていると考えています。レスパイトケアの必要性や取り組みの実際を知り、ケアを提供していくことができれば、地域で、自宅で生活している医療処置を必要としている子どもたちと家族が安心して生活していけるのではないかと思うのです。

本特集では、病院・施設・地域で子どもと家族にレスパイトケアを提供している専門家に執筆を依頼しました。それぞれの地域や施設の特性に違いはあると思います。しかし、ちょっとしたアイデアや取り組みの工夫などを参考にすることで、本特集に関心をもってくださった読者の皆さんにも、レスパイトケアの担い手として、子どもと家族へのレスパイトケアに参加していただけるのではないかと期待しています。

社会福祉法人鶴風会東京小児療育病院看護・生活支援部看護科
教育担当係長／小児看護専門看護師

倉田慶子 Kurata Keiko